

土佐清水市史編集委員会・武藤清編集委員

・・・『新市史』『市政史』の講話を行う！



6月17日(土)、土佐清水市中央公民館・2階会議室にて「土佐清水市郷土史同好会定例会」が開催され、そこで9時30分から約1時間にわたり、同会会長であり、当市史編集委員会編集委員・武藤清氏による『新土佐清水市史』『市政史』の講話を行った。

(1)市史編さん事業が実施されることになった経緯、(2)戊辰戦争から市制発足までの流れ、(3)市政史に関する概要及びそのトピックス、(4)清水小学校『百年誌』から、以上の4点を柱に講話は進められた。

(1)では、武藤氏が市議会議員のときに、現行『土佐清水市史上巻』(次より現行『市史』と記す)で近現代史を担当した故・中村春利氏(元土佐清水市郷土史同好会会長・顧問)から次のような相談を受けた。

それは、「多忙な中、教職員をしながら執筆した。よく読み直してみると不十分な点があり気にかかる。できれば早い時期にこれを改訂したい」という内容であった。武藤氏は、市議会で市史改訂を市執行部に提案した。思いがけずそれを泥谷市長が応じてくださり今回の市史編さん事業が実施されることになった。

(2)では、明治8年(1875)の大小区制、明治11年(1878)の郡区町村編制法により郡が行政区画となる、明治22年(1889)の町村制発足等の明治期の自治体変遷史を確認した。また、大正13年(1924)の清松村→清水町へ、昭和16年(1941)の上灘村が清水町に吸収合併、昭和22年(1947)の三崎村の町制施行、昭和25年(1950)の下川口村・下ノ加江村の町制施行等々、大正期から昭和29年(1954)8月1日の4町合併の市制施行までの自治体史の流れを確認した。

(3)では、中浜万次郎を軸とした姉妹都市交流、ジオパーク活動等、市制発足から今日までの市政史に関係するトピックスを何点か挙げて話を進めた。(4)では清水小学校『百年誌』の内容について触れ、鍛冶屋駄場からスタートした清水小学校の校舎の変遷について取り上げ、越小学校や加久見小学校が存在していたことについても触れた。

なお、土佐清水市郷土史同好会の年間計画では、8月以降に定例会で『新土佐清水市史』

の編集委員会の各委員を招聘して講座を実施する予定を計画している。土佐清水市郷土史同好会では、会員以外の広く市民の皆様の出席も歓迎とのことである。



【編集後記】

『土佐史談 282号』に「高知県西部 大正九年豪雨災害 -土陽新聞と水害碑銘文から-」との主題で論文を書かせていただきました。今月2日に沖縄ジョン万次郎会の講演依頼があり出張。その朝、豪雨のため警報が発令されたが、既に出張で市役所を出発していたためそのまま松山空港に向かいました。

途中、山伏峠、三崎道の駅前、大月町才角から姫ノ井にかけての一带で道路冠水や国道に山からの出水が流れ、公用車ごと流されそうに。特に、山伏峠の国道には拳大の落石もパラパラと出水に混じり落石しており正に危機一髪の状態。

その日やっとの思いで松山に着き、翌3日に沖縄万次郎会赤嶺会長や中眞事務局長に「やはり万次郎の講演に行くと、嵐を呼ぶのでしょうか」と話すとお二人とも「そうかもしれません」と笑いながら納得されていました。

公用車で豪雨の中、サニーロードを走っていると、大正九年の豪雨災害もきっとこんな状況だったのだろうと思いました。大正九年豪雨は、台風上陸を伴う災害だったといえます。今回は台風こそ上陸はしませんでした。沖合を台風2号が通過しており、台風は梅雨前線が影響を受け線状降水帯が発生しました。この線状降水帯は、和歌山県→静岡県へと移動し、甚大な被害をもたらしました。

今年は、いくつ台風が高知県に上陸もしくは近くを通過するのでしょうか。梅雨時期の早まり、台風の巨大化、線状降水帯等々、心配の種が尽きません。地震も各地で発生しています。このような状況だからこそ、日頃から防災意識をしっかりと持つ必要があると思います。皆さんはどう思いますか。(田村)